

Topic4 Report

取材・文＝中東生
Text＝Shinobu Naka

テオドール・クルレンツィス指揮 ムジカエテルナinバーデン・バーデン

ワグナーとヴェルディ クルレンツィスの「現在」

テオドール・クルレンツィスとムジカエテルナはロシアのウクライナ侵攻後、批判に晒されている。バーデン・バーデン祝祭劇場の秋フェスティヴァル「La Grande Gare」では、ワグナーを振るといふことで注目されていた《トリスタンとイゾルデ》だが、ノルウェー人のビルギット・クリステンセン(S)が降板した。代役も見つからず、ほかのツアー先とも話し合った結果、悲惨な戦禍も加味してヴェルディ《レクイエム》に演目を変更したという。

しかし、11月18日の初日の翌日、元々予定されていた「覆面プログラム」の演奏会に赴くと、ワグナーの序曲づくしが迎えてくれた。《タンホイザー》序曲の出だしは拍子振りでつまらないと思ったが、弦が入ると色彩を帯び、うねる波のように迫ってきた。続くヘタ星の歌での、マルケ王を歌うはずだったマティアス・ゲルネ(Br)の、大きなフレージングですべてを包み込む優しさは、2016年バイエルン州立歌劇場来



現在批判の矢面に立たされているテオドール・クルレンツィス。彼の率いるムジカエテルナと共に、今後の動向が気になるところだ
© Andrea Krempner

日公演での好演をさらに超えた。「《パルジファル》第一幕前奏曲」では清らかな響きに終始し、《トリスタンとイゾルデ》

の《前奏曲と愛の死》は想像通り官能的だが、尽きることのない高揚感、頂点に達してもしやかな大鳥みたいに空中を

舞っている。「ローエングリン」第一幕前奏曲」までは神妙な表現だったが、最後の《ニュルンベルクのマイスタージンガー》第一幕前奏曲」ではようやく軽やかに、希望を見せた。最後は終幕の合唱で全員喜びに包まれた。

翌日のヴェルディ《レクイエム》は、以前聴いた自己主張の強い個性的なアプローチではなく、内省的で深みが増していた。やっと聴こえるほどの弱音で始まるのは同じでも、それを誇示するのではなく、必要性が感じられる。ゲルネは前日に続き、ヘラクリモーザで完璧なレガートを聴かせたが、狭いドイツ語ふうな「オ」の母音の発音が気になり、逆にアリアでは声のフォークラスが欠け、苦しそうな部分もあった。トリスタンを歌うはずだったアンドレアス・シャーガー(T)は息でレガートをつなげないのだが、声が当たったときの満足感は大い。女声は以前と同じキヤストだが、クルレンツィスのお気に入りソプラノ、ザリーナ・アバエヴァは適役と思える好調な出だしの後、以前から散見された、高音で音程がぶら下がる傾向がより顕著に現れるようになり残念だ。メゾのエヴェ・モー・ユボーは響きが豊かになったが胸声はまた弱い。それでも繊細な歌い出しなど、安心して聴ける。

この2演目の満足感は長い間に留まり、折に触れて《レクイエム》を自然に口ずさむ日々が続いた。これもクルレンツィスの言う「ミッション効果」だろう。